映画人よ！誇りと情熱を…。

日本映画アカデミー賞の第10回を祝って

草壁久四郎
KYUSHIRO KUSAKABE

日本映画アカデミー賞がことしで第10回目を迎えるとのこと。まずは心からおめでとうを申しあげたい。日本で最初の「映画人による、映画人のための、映画人の」映画祭典としてスタートした日本映画アカデミー賞の10回目にあたって、私自身にもいろいろと感慨が湧いてくるものがある。第１回の授賞式当日、どしゃ降りの雨の中を着なれぬタキシード姿で会場にかけつけたこと。そして日本映画界をあげての初のビッグイヴェントとしてデビューしたこの日本アカデミー賞を、一種の興奮と不安との交錯する気持ちで見守ったことを、つい昨日の出来ごとのように思い出すのである。おそらくは発足当初からあったにちがいない各種のトラブルや困難に耐え、それを克服してきた日本アカデミー賞関係の皆さんに敬意を表したい気持ちである。

アカデミー賞が歩いたこの10年間は、日本映画にとってもかなりきびしい歳月であった。経済成長の鈍化、レジャーの多様化に伴う映画人口の低下が、日本の映画産業にも深刻な影響をもたらしたことは周知の通りである。製作機構の縮少による製作本数の減少は、いろんな意味で映画界にかなりの打撃をあたえたことも事実である。そうした日本映画ぜんたいを覆うような、ブルーな沈滞ムードの中で、映画人たちを勇気づけ、励ましとなってきたのは各種の映画賞、なかでも〝映画人による映画人のための映画人の〟映画賞である日本アカデミー賞であったにちがいないと私は信じている。

私事になるが、この数年間、私は映画ジャーナリストとしての仕事を、もっぱら海外の映画祭の視察と研究に集中してきた。世界の主要な映画祭に出席して、日本では見られない国々の映画を見たり、いろんな国のいろんな映画人と映画について語り合ってきたが、そんなときいつも感じるのは、各国の映画人たちが、映画人であることを誇りにして、堂々と胸を張って自国の映画について、じつに熱っぽく語ってくれるということである。

昨年は９ケ国の映画祭に参加してきたが、そのなかでもユーゴスラビアのプーラという海辺の町で催された国内映画祭が強く印象に残っている。古代ローマの遺跡コロシアムの野外劇場で開かれる年に１度のプーラ映画祭では、その年に製作された約20本の映画がコンクール形式で上映され、作品賞をはじめ各種の個人賞が決定発表されることになっている。その映画祭にはユーゴの全映画人が集って、１週間にわたってユーゴ映画が直面する問題について真剣な討議をつづけ、最終日には受賞者を全員で祝福する。そこに参加して私が感じたことは、映画人たちがじつに熱心に、そして情熱的に映画に取り組んでいるということだった。ユーゴが直面している経済的、政治的な局面にもかかわらず、いやむしろそうした困難を映画人が克服してみせるという意気とたくましさを感じさせられたのである。

このことはユーゴにかぎらず、国際映画祭に共通したことだが、多くの世界の映画人たちが、現実の困難な状況にもめげず、映画と映像というものの未来と可能性を確信し、映画という仕事に情熱をもって立ち向っているということである。そしてそこでは映画という共通語で、国境と人種とを超えて映画人たちが友情をもち、映画という共通の言語で世界の平和を語り合うことができるということである。私はそうした国際映画祭に参加するたびに、自分が映画を愛し、映画の仕事をつづけてきたことの幸福を感じるのである。

昨年12月、キューバの首都ハバナで開かれたラテンアメリカ映画祭に参加したが、ここではコロンビア出身のノーベル賞作家ガルシア・マルケスを会長に、中南米の13カ国が連帯してラテンアメリカ映画連盟を設立、それを祝賀する式典が盛大に行われたが、その席上でキューバのカストロ首相が、映画について約１時間にわたるスピーチをやって出席者につよい感銘を与えた。またこの連盟の中核となっているマルケスをはじめ、キューバ文化副大臣のフリオ・Ｇ・エスピノーザ、ＬＡ国際映画大学の総長フェルナンド・ビリー、キューバ映画監督協会長のトマス・アリアの４人は、いずれもローマの映画実験センター(チェントロ)の出身で、1950年代のイタリアン・レアリズモの洗礼をうけた同志だが、そのローマ時代にこのラテンアメリカ映画の革新をめざす連盟のことを語り合い、それを30年後に実現させたという話をきいて深い感銘をうけたことであった。

ひるがえって日本を考えるとき、映画が文化財として国家と大衆とによって尊重される国と、映画が商品なみの消費財として粗末に扱われる国との格差の大きさにがくぜんとしないではおられない。しかし私はあえて私自身を含めた日本の映画人に問いかけたい。日本の映画人自身にそうした意識が欠如しているのではないだろうか。映画産業の衰退が映画人の心まで衰退させたのではないだろうか。かつて栄光のときに日本の映画人が高くかざした誇りは失われたのだろうか。

とはいいながら日本映画の国際的評価は、かつての先輩たちの築いた栄光によって、辛うじて保たれているようである。そしてミゾグチ、クロサワ、オズに続く新しい日本映画が待望されているのである。

日本映画アカデミー賞の10回記念に際して、あえて苦言を呈して日本映画人の皆さんに、誇りと自負と情熱をもって映画に立ち向われんことを期待する次第である。

(映画評論家・東京国際映画祭特別顧問)